

EU 拡大の解釈

— 歴史教育の文脈から —

神奈川県立小田原高等学校教諭
池田 知正

○はじめに

2015年10月18日、ドイツのメルケル首相は、トルコのEU加盟を容認する用意があるという趣旨の発言を行った。そのわずか10日ほど前には、トルコのEU加盟はありえないと断言していた姿勢を一転してのことである。トルコを経由してヨーロッパに流入するシリア難民の問題解決のため、トルコに協力を要請したいと思惑がこの発言の背景にあるとされている。1963年にEEC加盟を申請して以来、トルコが欧州統合組織への加盟を要求して久しい。2005年にはトルコのEU加盟交渉が開始されたが、長く加盟への見通しが立たなかった末の動きであった。さらに2016年3月18日には、EUがトルコの加盟交渉を加速させることを約束し、トルコのEU加盟はさらに前進した。仮にトルコのEU加盟が認められた場合、EU拡大という事象をどのように解釈したらよいか、高等学校の世界史教育という文脈のなかで展望してみたい。

○トルコのEU加盟問題

冷戦終結後に旧共産主義諸国の多くがEU加盟を果たしてきた一方、トルコはその政治的後進性を理由として加盟がまだに認められていない。女性・少数民族などの人権問題を抱え、この点でEU加盟基準を満たしていないとされるのである。もっとも、トルコのEU加盟を妨げている実質的な要因として、政教分離とはいいいながらも実態としてのイスラーム教国であるトルコに対するEU側の宗教的排斥感情があることは確かである(河野2005)。EU諸国内で加盟反対の声が大きい国として、トルコとともに、アルバニアやボスニア=ヘルツェゴヴィナが挙げられている(田中俊郎2007)。これらの国は、政治・経済的に不安定な国であることはいまでもないが、いずれも住民の多くがイスラーム教徒である「イスラーム国家」なのである。EUは「キリスト教クラブ」と称されるように、その加盟国は全てキリ

スト教国である。トルコのEU加盟が実現すれば初のイスラーム教国の加盟となる。これまでは、キリスト教を欧州統合の推進力の一つとする解釈でEU拡大を語る事が可能であった。しかし、トルコ加盟の動きが急加速している今日、EU拡大に新たな解釈を導入する必要性が生じるかもしれない。

○ヨーロッパ統合の理念

高等学校世界史教科書では、欧州統合の当初の目的は石炭・鉄鋼などの資源共有にあったとされている。欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)の成立を皮切りに、経済障壁の低下や原子力の共同管理にまで統合対象が拡大され、欧州共同体(EC)の成立にいたったと叙述される。そして、第二次世界大戦以前のヨーロッパの戦争の多くが石炭・鉄鉱石などの地下資源の争奪戦という性格が濃厚であったことへの反省が、欧州統合のきっかけであると語られることが一般的であろう。高等学校世界史教科書では、西欧統合から欧州統合が始まったことは記されても、その統合理念として「キリスト教」を加味することはあまりない。一方で、欧州統合を語る際に高等学校の世界史教育の場面にしばしば登場する人物が、クーデンホーフ=カレルギーである。彼は、ヨーロッパにおける石炭・鉄鉱石の共同管理の必要性を主張したうえで、欧州統合の理念の淵源となったとされるパン=ヨーロッパ主義を唱えた。

クーデンホーフ=カレルギーは、主権国家体制下で超国家的権威(皇帝や教皇といった、かつて西欧世界において普遍的であった権威)の決定的消滅に直面したヨーロッパの再統合のあり方として、アメリカ合衆国をモデルとする連邦制を想定した。その際に、ロシアを統合対象外としている点は興味深く、彼がロシアを「ヨーロッパ」外とみなしていることがわかる。彼は、ヨーロッパ文化をギリシア文化とキリスト教、ゲルマン文化が融合したものであると考えている。彼の著書『パン=ヨーロッパ』の表紙

には、欧州の超国家的共同体の象徴として太陽と赤十字が描かれているが、前者は古代ギリシアのアポロンを、後者はキリスト教の十字軍を表している。すなわち、ギリシア精神とキリスト教をヨーロッパ文化の最古かつ永遠の基層であるとみなしているのである。とりわけ「十字軍」をヨーロッパ文化の象徴の一つとしている点は注目される。さらに、彼は仏王フィリップ4世の顧問であったピエール=デュボアの思想に触発されたことも認めている。ピエール=デュボアは、キリスト教共和国による聖地奪回を提案した人物なのである(田中文憲2004)。以上より、クーデンホーフ=カレルギーが想定した「ヨーロッパ」とは、十字軍を発動したカトリック圏を中心とする「中世西欧世界」であるとも解釈できる。

クーデンホーフ=カレルギーが欧州統合理念の基層に据えたものがギリシア古典古代と中世西欧キリスト教世界であったとするならば、双方の世界の狭間にあってこれらの橋渡しをしたものがローマ帝国であったことにも着目したい。高等学校の世界史においては、カール大帝の西ローマ皇帝戴冠について、「西ローマ帝国」が復活し、西欧世界が再統合され、中世西欧世界が形成されたと説明する。中世西欧世界は、カールの戴冠によって古典文化(古代ギリシア・ローマ文化)とキリスト教、ゲルマン文化の要素が統合されて成立したと解説されるが、クーデンホーフ=カレルギーの想定する「ヨーロッパ文化」の特徴と軌を一にすると理解できる。さらに、彼が中世西欧世界の拡大運動である十字軍をパン=ヨーロッパ主義の理念の一要素ととらえている点に着目すれば、欧州統合の理念の基層に十字軍があるのではないかと想定されるのである。

○キリスト教徒と異教徒の相剋

いうまでもなく、十字軍とは異教徒に対するキリスト教徒による「聖戦」である。

9～10世紀になると、西欧世界はイスラーム教徒・マジャール人・ノルマン人などの進入を被るようになり、キリスト教世界の「防衛」という積極的の意味をともなった「聖戦」概念が定着する。キリスト教世界、いい換えればカトリック圏たる西欧中世世界に脅威を与える存在があれば、対象を選ばずに十字軍が組織されるようになったのである。ときに、カトリック世界は、異宗派であれば同じキリスト教

徒をも十字軍の対象とすることがあった。もっとも、十字軍には東西教会(カトリックと正教)の統一や聖地エルサレム回復の意図はみられるものの、イスラーム教をはじめとする異教世界の再征服や異教徒に改宗を要求する側面を読み取ることはできないと指摘されることもある(八塚2008)。

さて、十字軍の活動を支える「聖戦」概念の誕生は、十字軍の遙か前にさかのぼる。キリスト教は本来、戦争否定の宗教であったが、ローマ帝国の国教となり国家と一体化したとき、異教徒の征服を行い、彼らに改宗を迫るようになった。6世紀に教皇グレゴリウス1世が異教徒のゲルマン人にキリスト教伝道を行ったとき、改宗と征服が結びついた(八塚2008)。また、8世紀にフランク王国宮宰シャルルマーニュがザクセン人征服を行う際にも、キリスト教への改宗が政治的征服と同等に重視された(松本2009)。こうして異教徒の改宗・征服を旨とする「聖戦」思想が中世西欧世界において成立したのである。

○おわりに

これまで、トルコはEUの加盟条件を満たしていないという理由で加盟が拒否されてきた。EU加盟の条件が、近代において西欧で発達してきた政治思想・人権思想にもとづくことはいままでもない。加盟条件をトルコが満たすことは、トルコの西欧化がさらに徹底されることを意味しよう。西欧化を「改宗」と重ね合わせて考えるならば、トルコのEU加盟を西欧による現代的な「聖戦」による征服とみなすこともできるかもしれない。

【参考文献】

- 河野健一「EUはボスボラス海峡を越えるかートルコ加盟問題の考察ー」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』6, 73～85, 2005。
- 松本宣郎編『宗教の世界史8 キリスト教の歴史1』(山川出版社, 2009)。
- 田中文憲「ヨーロッパ統合の立役者たち(1)ーリヒャルト・クーデンホーフ=カレルギーー」『奈良大学紀要』32, 1～18, 2004。
- 田中俊郎「EU統合の軌跡とベクトル」『日本EU学会年報』27, 15～28, 2007。
- 八塚春見『十字軍という聖戦ーキリスト教世界の解放のための戦いー』(日本放送出版協会, 2008)。